

# 十二代三輪休雪（龍作） 《愛の為に》

十二代三輪休雪（龍作）（1940-）  
《愛の為に》

1968年  
陶土／轆轤成形  
高さ17.5 幅27.0 奥行き8.0cm  
平成26年度購入

撮影：アローアートワークス

## 本

作《愛の為に》は、その容姿から通称ハイヒールと呼ばれています。

実は、やきものでつくられています。横縞があるように見えますが、それは轆轤目なのです。やきものを成形する道具のひとつに轆轤がありますが、この作品では、つま先、本体、ヒールと、各パーツを轆轤で成形し、それらを組み合わせてつくり出されています。よく観ると、つま先の部分が、ほのかにピンク色にもなっています。

作者は山口県萩市で江戸時代に長州藩（萩藩）の御用窯を務めた陶家、三輪家の当主、十二代三輪休雪です。このハイヒールは、東京藝術大学大学院陶芸専攻を修了した翌年、一九六八年に制作されました。当時は三輪龍作の名前で活動を始めたばかりでした。

十二代休雪は修了制作で《花子の優雅な生活》と題して、白色や赤色のハイヒールを六十から七十点ほど発表しました。その翌年には、個展「三輪龍作の優雅な欲望展」でさらに点数を増やして会場を構成しました。このハイヒールはその個展の際につくられたものです。発表当時、「下駄箱に入れておくくらいが関の山」と言われたようですが、その後も十二代休雪が、愛と性（エロス）を制作のテーマにして、奇抜なネーミングとショッキングな作品群の発表を続ける中で、その原点となる処女作ともいべき陶によるハイヒールが注目

を集めて、今日では日本の陶芸史に残る作品となりました。

このハイヒールは、萩焼としての茶碗や花器などを制作するための土とまったく同じものが用いられ、三輪家伝統の藁灰を原料とした白萩釉が施されて、薪窯で焼き上げられました。淡いピンク色は焼成時における窯変によるもので、窯の中で炎が強くあたたまったところに見られる現象です。萩焼では見どころのひとつとして知られる、特有の表情ともいえるものです。まさに、由緒ある陶家出身者が生み出した真正正銘の萩焼なのです。

しかしながらその姿は、これまでの萩焼とも、単なる靴の造形とも違っています。十二代休雪は学部時代、彫刻を専攻していたものの、自身の心情を表現するには絵画の方が実在感を覚えたといひ、独学で絵画制作に没頭し、自己を投影していききました。その転機が修了制作であり、仕方なく土を素材としつつも、因襲に縛られることなく、自由に、自己の心情や欲望の世界をぶつけました。そして、内面的な表現が不向きと思われた素材で、見事に自己の想いを具現化することに成功しました。女性を連想させるアイテムからは、そのシンボリックな、あるいは性に対する挑発的な意味合いが込められているように感じます。

（工芸課長 唐澤昌宏）